清水次郎長の手紙

吉永孝雄

終戦後間もなく私は有名な蒐集家の渡辺得次郎氏の未亡人から、毎月三、四本の珍らしい書簡や原稿類をゆずって貰った。幸田露伴の原稿や、徳川慶喜や伊能忠敬や佐久間象山や岩倉具視や山県有朋や吉田松陰や久坂玄瑞や大村益次郎や中井履軒や頼山陽や木村蒹葭堂や細井平洲など二百人に及ぶ人々のその書簡の中に清水長五郎の手紙が一軸あった。面白い手紙であったので秘蔵していたが家を建てる時少し金が足りなくなったので弟の高木源次にゆずってしまったが、今思っても心に残る手紙であるので、これを紹介して、この手紙に出て来る事件や人物を解説したい。きっと辭談で聞く清水次郎長とは別の彼の一面を知って貰えるかと思う。すべて平仮名で書かれているので読みづらいかも分らないが原文をそのまま引用する。（」で改行する）

まさも。さけと。わかい。おんな」で。はらお。くさらせ。とても。ぜんかい。」なし。だんだん。かんかいて。」みると。かづのこお。しろみつで」ひやして。みれば。よくわかる。」さけは。しろみづなり。つよいから。」たくさんのめば。はらがくさり」ます。それだから。すてられぬ」ひとには。よく。ねんとろに。おまゑさんから。よくはなして。おくれなさい。（一枚目）

五郎さんおよとりに」きめたからおたのみ」もおしますやまも」ことしからはみなこして」せいだいにするから」あんしんしておくれなさい」二月五日　　山本　長五郎

山おか

せんせいさん」（二枚目）

封筒に

山おか

せんせいさん　清水　長五郎　（表）

二月五日

ひとりでみておくれ」なさい　（裏）

スタンプ印は幾つも押してあるが最中上に「長とあり、下に大きく山木とあり右に駿清水とあり左に美ノ輪町とある。

この手紙を分り易く現代語に直すと次のようになろう。「あの大政も酒と若い女遊びで体をこわし、最早全快の見込みもない。つらつら考えてみると、あの数の子を白水（米のとぎ水）に漬けて見るとよく分る筈だ。酒は米で作った液体である。刺戟が強いから沢山飲むと胃腸を腐敗させる。身も心もとろけさせられるだけにおぼれると女同様その誘惑から免れることは出来ない。これはここだけの話で、外の人には、うまく、気を配って、貴方から、上手に話しておくれなさい。お前さんから頼まれた五郎を私の養子にきめましたから、今後よろしくお頼み申します。富士山麓開墾も今年から一家総動員で盛大に進めますから、私の一身上のことについては安心しておくれなさい。

二月五日　　山本　長五郎

山岡先生さん

この手紙を書いた清水ノ次郎長については吉田奈良丸らの浪花節で鬼よりこわい海道一の大親分に色々尾鰭をつけて宣伝されているので実説と思われる彼の一代を略述しよう。

本名山本長五郎。駿河国清水港の人。文政三年正月元日（一八二〇）生れ。父の名は三右ヱ門。船乗業。末子であるので伯父次郎八に養われた。それで次郎長と呼ばれるようになった。若くて喧嘩好きで近隣では相手になる者もなく遂に遊侠仲間に身を投じてしまう。当時幕府の政治も弛緩し、武士道も衰え一般社会も華美淫逸に奔っていたのでこれに乗じて遊侠無頼の徒も大いに勢力を張り、極力に抗し乾分を養い党を立て博奕を事とし闘争に明け暮れ、世に害毒を流す者も少くなかったが、その反面、義に富み仁侠を重んじ死生の巷に奔走して快としている連中も多かった。次郎長も屢々事件に関わり役人の手を逃れて身を隠すことがあったが、その間に四方の遊侠の人々と交わり、敵対する者と戦っては昔て敗北を喫した事なく、名声海道を圧するようになった。時に甲州の黒駒勝蔵は一方の覇者であった。次郎長はこの黒駒と争うこと前後十年屢々流血事件を起こしたが、元治元年四月六日伊勢の荒神山（笠置山）で一大決戦をしてこれを破って敗走せしめた。この話は浪花節でも有名な話である。明治元年旧幕府の海軍副総裁榎本武揚は開陽丸・回天丸以下の軍艦十一隻を引き具して奥州に遁れ函館に立て籠る事件が起ったが脱走の途中房総沖で暴風雨にあい、二隻を失った。（数年前文化庁の青少年芸術劇場で銚子に行った時丁度その引揚品の展覧会をしていたので、引揚げた艦中で見付かった鉄砲の玉四つを貰って記念に私は今も持っている）その中の咸陽丸は漂流して九月清水港に入港官軍の兵艦これを迎え撃って幕兵多く討死しその死体を海上

に捨てた。しかし後難を恐れてこれを収容する者がなかった。次郎長はこれを嘆いて部下の者に死体を収容させ、清水向島の地に葬った。この事が忽ち駿府の藩庁に知れ、彼は呼ばれて糺問を受けたが、悪びれず堂々と「この人々は皆主君の為に死んだ忠誠の士である。どうして魚腹に任せられようか。第一死体が港にぶかぶか浮いていては出入の船の邪魔になる」と弁明して事なきを得た。翌年山岡鉄舟は静岡藩政輔翼となって来任しこの話を聞いて感激しこの墓碑に壮士之墓と例の達筆をふるった。二人の交りはこの時から始まるのである。次郎長はこの一世の快傑山岡鉄舟に会ったことが、忽ち、心機一転、博奕を止め率先して海運の進歩を図り、また富士山の裾野の開墾事業を始め、囚人を使役して曠野数十町の耕拓をやるきっかけとなるのである。次郎長の人柄は寡欲恬淡、私財を貯えず、常に赤貧の中に暮した。明治二十六年六月十二日（一八九三）歿。年七十四才。清水の梅隠寺に葬る。榎本武揚墓銘に書して「侠客次郎長之墓」子弟三千。なかにも森の石松、大政、小政が人口に膾炙している。

さてこの「五郎さんを世とりにきめた」とある五郎という人物はどんな男であるのか。「山もこれから越してせいだいにするから安心しておくれなさい」というのはどんな事なのか。これが私のこの手紙を紹介する目的である。五郎は実は奇僧、歌僧として知られる正岡子規の歌よみの仲間であった天田愚庵のことである。

愚庵は安政元年磐城国平の城下に生れた。父は平藩の勘定奉行を勤めた甘田平太夫である。母はなみ、兄は善蔵、妹はのぶと言った。愚庵は初めの名は久五郎、後、姓を天田、名を五郎と改めた。明治元年六月官軍は薩長に反抗する東北の諸藩を討つため、まず白河棚倉の諸城を抜き平城に殺到、この所謂戊辰の戦いの渦中に一家はまき込まれるのであるが、兄は平城防衛のため出陣、父母と妹と十五才の久五郎は城下から一里離れた中山村に避難する。しかし間もなく久五郎も志願して戦争に加わるが、戦敗れて家に帰ると父母と妹とは行方不明になっていた。愚庵の数奇の生涯はここに始まるのである。彼はこの父母と妹を探し求めて二十年間全国を廻るのである。この間明治五年十九才で山岡鉄舟や落合直亮（直文の父）に紹介され、前者によって剣と禅を学び、後者によって明治の万葉調短歌復興の先駆となり、正岡子規との交りがはじまる。明治七年廿一才で台湾の役に従軍、帰って西南の役後土佐愛国党と政府転覆の画策を企てる。この噂を聞いた山岡鉄舟は折柄明治天皇に供奉して京都にいたので彼を呼びつけた。彼がその書状を手にし急いで入洛した時には鉄舟は天皇の逗幸に供奉して京都を出たあとであったので五郎はその後を追い静岡で鉄舟に追いつく。鉄舟の宿に着くと、鉄舟はいきなり「この軽っ尻の尻焼猿め」と一喝してその軽挙妄動を叱り

つけた。二十三才の若き五郎はこの大西郷を向うに廻して一歩もひけをとらなかった偉大な六尺二寸二十八貫の師の前で平伏した。そこへ色の黒いずんぐりした六十近くの町人風の男が這入って来た。清水次郎長である。鉄舟は「そこに居る馬鹿者を暫く預かって貰えまいか」と頼むと次郎長はギラリと光る眼で五郎を一瞥したが、眉の太い猛々しい五郎の風貌を見ると、「よろしうございます。お預り申しましょう。然しあまり狂うようでしたら、その時は胴切りにぶっ放すかも知れませんぜ」「いいとも、万事は親分に任せる。」こうして五郎は海道一、鬼よりこわい次郎長に預けられることになる。次郎長も親や妹をさがしている五郎の孝心に心打たれて協力して方々当るが相変らず親の行えは分らない。又も五郎は、立っても居ても堪らず明治十三年両親を求めて旅に出る。旅写真師となって伊豆半島、東海近畿と廻り身延山にも行った。信仰深い父の事だからもし廻国巡礼の際ひょっとここに立寄ったかも知れないと徹夜で山房の参詣帳も調べた。翌十四年彼は身も心も疲れ果てて再び清水港に帰ってくる。次郎長は心よく迎えた。この時である「五郎さん、どうだろう。いっそ事わしの養子になって、若い者の面倒を見てくれんか」と相談を持ちかける。こうして鉄舟等の同意を得て山本五郎となる。そして次郎長の経営する富士裾野の開墾場に多くの子分達と一緒に出かけ、掛小屋に寝起して彼等を監督することになるのである。この事を山岡鉄舟に報告した手紙が、右の手紙である。この手紙は今弟から娘の結婚の時引出物として港湾の会社を父が経営する婿にゆずられた。私は伯父としてこの手紙を大事に持ってほしいと祈りを込めて今この文を書いているのである。

さてこの次郎長の富士山裾野開拓の事業はどうなったか。何しろ溶岩ごろごろの瘦地である。苦労の多い割に実りは少く、もともと博徒上りの連中が大部分であるので、貧乏や苦労に堪えぬ根性なしで、逃亡、喧嘩に明け暮れ、その上資金も欠乏し流石の五郎も匙を投げて次郎長に中止を勧告。翌十七年五郎はこの経験を生かして有栖川宮家の開墾事業を手伝うことになった。折から賭博事件のとばっちりで次郎長は入牢、彼はもとの天田姓に帰る。

終りに一言付け加えたいのは江戸城の無血入城は大西郷と勝海舟の会談で出来上ったと思っている人が多いがそれより前一人の友をつれて官軍とりまく中を静岡まで乗り込み、大西郷にうんと言わせた男は山岡鉄舟であった。